

別なく、うつり行人情こそあだなりけれ、

〔後明院殿御實紀附錄〕濱の御庭へならせられし時、輿丁等御歸り待ほど、御輿をおろしたる側に、煙草のみて、互に戯れごとなど云しに、一人の輿丁坐睡して、手にもちし烟具をみな御輿のうちにおとしけるを、煮らすありしに、はやかへらせ玉ふとうちおどるかされ、狼狽してそのまゝにして御輿をかき出せしが、途にてこはいかゞとおもひわづらひ、かへらせ玉ひし後、御輿の中を探りもとめしかど、さらになければ、彌いぶかしく、やがて御輿のなかの御茵をあげしかば、其下に管も袋も紙につゝ、みてあり、これははじめ御茵の上に在しを、人の見付たらんには、重き罪たるべしとて、わざと御みづからかくはせさせ玉ひしなるべしとて、その輿丁ひそかに人にかたりて涙を流しける、

〔皇都午睡 三編上〕女用の烟草入、きせる、扇、鏡袋、履物等に至るまで、大方男持の少し小さきを用るなり、烟草入は腰にさし、扇は帶のうしろにさし、履物は草履をはかず、

○按ズルニ、皇都午睡ハ、嘉永年間ノ江戸風俗ヲ記シ、モノナリ、

〔南方海島志 下〕八丈島

風俗、中略婦人烟草入ヲ木皮ニテ製シ、紐ヲ甚長クシテ、ネリ玉ヲ貫キ腰ニ下ル、

〔煙草考〕烟盒。

俗謂烟草入也、多用漆器、或陶器、或曲輪、漢人此梨地、漢人此噴金、漢人此蒔繪、漢人此描金、漢人此彫紅、漢人此螺鈿、及銅鑰、紙器、俗所類也等、其形容不一、各從所好用之、納縷烟居盤上、

〔好色二代男 三〕敵なしの花軍

一夜阿波座の東南側のまがきに、中略松屋町焼の土火入に、寄反梳の莢入、寄取集めたる鍍金煙管、片手に客の文を寄合讀に譏る、